

文化財学習会

ふるさと探訪

テーマ 志度寺周辺を訪ねる

講師 岩井 隆（さぬき市文化財保護協会志度支部長）
平賀一善（(財)平賀源内先生顕彰会評議員）
近藤敬司（志度まちぶら探検隊）

平成21年2月22日（日）

共催 高松市歴史民俗協会
高松市教育委員会

1 さぬき市志度

志度は古代、造田郷と呼ばれ、早くから開けたところで、明治二十三年町村制の実施により志度村と末村が合併して志度村になり、同三十一年町制施行で第一次志度町になりました。その後、昭和二十八年に公布された町村合併促進法に基づき、昭和三十年（1955年）1月1日に第一次志度町・鴨庄村・小田村が合併、翌三十一年九月三十日に鴨部村が編入して第二次志度町が誕生しました。平成十四年（2002年）四月一日に大川郡津田町・大川町・志度町・寒川町・長尾町の五町が合併し、現在はさぬき市となっています。

さぬき市は、四国遍路八十八か所「結願けちがんのまち」です。海岸の志度には八十六番札所志度寺、平野中央の長尾西には八十七番札所長尾寺、讃岐山地の多和には八十八番札所の大窪寺があります。志度、長尾は門前町として町並みが形成されてきました。志度は高松市から十五km、車で二十〜三十分の距離にあり、JR高德本線と高松琴平電鉄の志度駅があります。北は瀬戸内海播磨灘に面し、志度湾・鴨庄湾・小田湾を形成しています。国道十号がほぼ東西に貫通し、東はさぬき市津田町、西は高松市牟礼町に接しています。

人口は、平成二十年十二月末現在、五万四千六百三十人でそのうち志度地区は二万二千百七十七人です。

2 志度寺周辺

志度寺（補陀落山清浄光院志度寺） 四国八十八箇所霊場第八十六番

本尊 十一面観音菩薩立像

美しい水をたたえる志度湾のほとりに建つ志度寺は、広々とした境内に五重塔がそびえ本堂、大師堂、庫裏、宝物館が建っています。

推古天皇三十三年（626年）に志度の浦に打ち上げられた霊木そのこで菌子そのこという尼が観音像を彫り、本尊として祭られたことが志度寺の始まりとされています。

天武天皇十年（681年）には藤原不比等がらんが伽藍を建立し、「死渡道場」と名付けました。また持統天皇七十六年（693年）には藤原房前（不比等の子）が堂宇を建立したと伝わっています。実際の創建は平安時代前期と考えられ、四国管領細川頼之により保護されま



志度寺本堂（国指定重要文化財）

した。天正十年（1582年）戦乱のため寺院は焼失し、荒廃しますが、生駒親正夫人教
芳院による観音堂の再建、松平頼重公による寄進（本堂・仁王門）などにより再興され、
現在に至っています。

本尊のほか脇士不動明王と毘沙門天の二体・絹本著色十一面観音像・絹本著色志度寺縁
起図絵・本堂・仁王門が重要文化財に指定されています。

細川頼之により築造され、寄進された曲水式庭園は、水墨で描いた山水画を彷彿とさせ
ます。また謡曲「海人」で知られる「玉取り伝説」が有名です。

本堂（国指定 重要文化財）

観音堂ともいい、桁行き七間、けただき梁間七間、はりま入母屋造り、いりもや向排三間、こうはい本瓦葺の大規模な仏
堂です。軸部が太く中世以来の密教仏堂の伝統を残しています。この堂は仁王門とともに
讃岐藩主・松平頼重が寛文十年（1671年）に寄進したもので、本尊とともに重要文化
財に指定されています。

山門（仁王門 国指定 重要文化財）

三つ棟木という珍しい工法で寛文十年（1670年）藩主松平頼重公により建立されま

した。

仁王像は鎌倉時代運慶の作とされ香川県指定の文化財となっています。天正十一年（1583年）侵攻してきた長曾我部軍がこの仁王像の迫力に気おされ、門の前で馬が動かなくなり、寺は焼き討ちを免れたという伝説があります。門の両側には3mもある大わらじが吊り下げられ、お遍路さんを迎えてくれます。

琺瑯堂えんまどうと奪衣婆堂だつえぼ（県指定 有形文化財）

琺瑯堂えんま

桁行三間けたゆき、梁間三間はりま、向拝一間こうはいの本瓦葺宝形造ほんわきほうぎょうづくりです。垂木かえるまたに反り増しがあり墓股かえるまたなども古式で、本堂より一時期古い様式をもっています。寺伝では寛文十一年（1671年）といわれています。

奪衣婆堂だつえぼ

奪衣婆だつえぼとは三途の川のほとりにいて、亡者の着物をはぎ取る老婆のことです。はぎ取った着物は衣領樹いりょうじゆの上けんえおうにいる懸衣翁けんえおうに渡し、衣の重さによって死後の処遇を決めるとされています。奪衣婆だつえぼは琺瑯堂えんまとほぼ同じ造りですが、本堂より新しく十八世紀中の建造物です。

五重の塔

五重塔は昭和五十年、大阪で成功した竹野二郎氏が建立。広島県福山市の明王院五重塔（国宝）を模し、塔の高さ三十三m間口四・五m五層の総檜づくりで、三年三月をかけ、昭和五十年五月十八日に落慶しました。



五重塔

海女の墓（さぬき市指定 史跡）

境内の一角に海女の墓と伝えられる、古い五輪塔がひっそりと立っています。中央の大きな五輪塔が海女の墓と言われ、左右の円柱形の二基は経典を納める経塚です。

【海女の玉とり伝説】

天智天皇の頃、亡父鎌足の供養に奈良興福寺建立を発願した藤原不比等は、唐の皇帝の妃であった妹から送られた三つの宝珠を、志度の浦で龍神に奪われてしまいました。不比等は志度の浦に身分を隠して渡り、土地の海女と夫婦になり一子房前をもうけます。その



海女の墓（左右は経塚）

後、不比等が志度の浦に来た理由を知った海女は、夫のために玉を取り戻そうと海に潜ります。その代わり二人の間の子房前を藤原家の跡取りにすることを約束します。海女からの合図で命綱を引き上げると、哀れにも海女の手足は龍に喰いとられ、縦横に切った乳房の中に宝を隠していた海女は不比人の腕の中で絶命しました。体内から取り出された「不向背珠の珠」は興福寺に奉納されました。後年大臣に出世し、父より母のことを聞かされた房前は、行基を連れて志度へ母の供養に訪れました。千基の石塔を建立し、堂宇を建立して、亡き母の菩提を弔ったといわれています。物語は謡曲「海人」で広く知られています。

曲水式庭園

室町時代、代々四国管領・細川氏の寄進によるこの庭は、細川勝元が完成させました。三百坪の広さがあり、水墨画の山水画を彷彿とさせる景色で知られています。書院の庭に当たる枯山水の「無染庭」は、昭和を代表する造園家重森三玲の作で、七個の石と白砂で構成し、海女の玉取り伝説の情景を現す庭園です。



曲 水 庭 園

自性院（微雲窟自性院常樂寺）
びょうんくつじしやういんじやうらくじ

本尊 不動明王

本堂の場所は志度寺の元御影堂（弘法大師をまつる堂）（みえどう）といわれています。平賀家は檀家であり、正面を入ると右側に平賀源内のお墓があります。平賀家を継いだ末妹の婿、権太夫が建てたものです。また、この寺にはさぬきの良寛さんと呼ばれている竹林上人が、七代目の住職として就任していました。

竹林上人は宝暦八年（1758年）生まれで、平賀源内より三十年程後の人です。竹が好きで竹林、竹谷と自ら号しました。清貧に甘んじ、身を修め、仏の道を説いた聖僧でもあります。

天明四年（1784年）二十六歳の時、院主に就任しましたが、一年半で弟子に譲り自らは院の近くに草庵を結び布教をはじめます。貧しい者には衣食を分け与え、不殺生戒を重んじ、儒教をはじめ書画、俳句、和歌、算術、生花、茶の湯など多くの学問芸術に通じていたそうです。また、間川地区（まかわ）に仏にちなんだ三十二の名勝を作りました。自分自身の死を予言し寛政十二年（1800年）六月六日に入定、三十三回忌には京都小野随心院の宮より上人号が送られました。

3 平賀源内先生遺品館

昭和五十四年、源内の偉業を永く顕彰し、文化の向上に資することを目的とする平賀源内顕彰会が、没後二百年祭記念事業の一環として建築。源内焼・陶器工夫書・エレキテル・薬箆筭・杉田玄白の書簡などを展示しています。遺品館の隣には旧邸が残されており、南側には薬草園があります。

遺品館内にある大理石の胸像と旧源内邸内にある銅像は、東かがわ市出身の作家小倉右一郎（香川県立高松工芸高校第八代校長）が制作しました。



平賀源内先生遺品館 玄関



薬草園



平賀源内先生 銅像

平賀源内

平賀源内は享保十三年（1728年）志度で生れ、蘭学者・本草学者・洋画の先駆者・浄瑠璃作家・鉦山家など多芸多才な才能あふれる人物でした。また源内は非常に多くの名前を持っていました。



成長過程において四方吉、伝次郎、嘉次郎、元内、

源内、諱は国棟、国倫、国倫、本草・物産学では鳩溪、俳

諧の号は李山、戯作者としては天竺浪人、風来山人、

桑津貧楽、貧家銭内など、浄瑠璃作家としては福内

鬼外と名前を使い分けています。

十二歳で軸物仕立てのからくり「お神酒天神」を作りしました。二十二歳で父茂左衛門の後を継ぎ、高松藩志度御蔵番となり、その後長崎に遊学、本草学とオランダ語、医学、油絵などを学びました。妹に婿養子を迎え、家督を放棄し自身は大阪、京都で学び、さらに江戸に出て本草学や漢学を学びます。

物産の博覧会を日本で始めて提唱し、伊豆で芒硝

を発見、秩父では鉾山の採掘を始めます。江戸での知名度も上がり、老中田沼意次にも知られるようになります。杉田玄白、大田南畝、司馬江漢、田村藍水、賀茂真淵など時代を彩る数々の著名人と知り合い、特に杉田玄白は終生の友となりました。安永八年十一月二人を誤って殺傷し投獄されます。十二月十八日獄死、幕府の許可が下りなかったため、遺体もなく墓碑もないまま杉田玄白により葬儀が行われました。享年五十二歳でした。

4 町並み

志度寺から源内先生遺品館までの源内通りには、昔の風情を残す建物や石灯籠が多く残っています。

志度寺の門前を出ると竹林糖で有名な二見屋があります。生姜の風味が香る竹林糖は自性院の高僧竹林上人にちなんだお茶菓子です。

こんぴら灯籠西側に、国登録有形文化財の以志や旅館があります。漆喰しっくいの塗り壁や連子格子を備える町屋造りの、古風で落ち着いた佇まいは、由緒ある古い町並に見事に調和しています。



新町自然石灯籠

うだつのある家を左右に見て西北側に、魚うおみどろ霊堂といわれる志度寺奥の院地蔵寺があります。

地蔵寺（如意山文殊院地蔵寺）

本尊 文殊菩薩

志度寺の奥の院で、開祖は志度寺本尊かいげんを開眼し、同寺を創

建したそのこあま菌子尼（文殊菩薩の化身）です。大和時代に、日本武

尊の子（れいし靈子）が退治した悪魚の崇りを恐れ、地蔵菩薩を

祀りお堂（うおみどろ魚霊堂）を建てたことに由来するので、この寺を

地蔵寺と称となえました。

歴史が古くて創建が何年であるかは定かではありません

が、当寺の南側に「海鴉えのうおくちうおみどろ口魚霊堂」と刻んだ石柱があります。

幾度かの戦火に遭い、現在の形になったのは享保十四年（1729年）中興の祖、密英が
出て三間四面の総檼造りの本堂を再建してからです。密英は本堂の建立にあわせ「日本廻
国六十六体尊」も建立しました。

また、地蔵寺には樹齢は不明の樹高二十m、幹周り五・三mの柏の大木があります。幹
が高く振れて竜が天に昇る様相をしているため、昇竜柏と呼ばれ、境内の東と西に二本あ
りました。西側の木は落雷や台風により傾きがひどくなり、倒れるおそれが出たため昭和



地蔵寺（魚霊堂）

五十八年やむなく伐採されました。

【海鵝口魚靈堂由来】

景行天皇の頃、土佐の海に大魚がいて、船を襲い、人を喰い、横暴の限りを尽くしていました。景行天皇は日本武の尊の子、靈子れいしに悪魚退治を命じます。これを知った悪魚は瀬戸内海に逃げ込み、志度浦に入り込み昼寝をしていました。靈子れいしは五百の軍船と千数百人の兵士を集め出發しましたが、悪魚に一のみにされてしまいます。勇敢で沈着な靈子れいしは策をめぐらし、体内にある軍船に火をつけ悪魚を退治しました。

後年、里人たちがこの悪魚たたりの崇を恐れ、お堂を立てて地藏菩薩を祀ったのがこの地藏堂うおみどう（魚靈堂）と伝えられています。またこのあたりを「江の口」と呼んでいるのは、えの魚（悪魚）の口を葬ったことに由来すると言われています。

【日本廻国六十六体尊について】

鎌倉時代から中世にかけて日本全国（北は陸奥、出羽から南は薩摩、大隈までの六十六カ国）を巡るもつとも長い道のりの巡礼がありました。この巡礼はその神社、仏閣の本尊様を拝むこと以上に、その所在する国を拝むことに意義があるので、当時の国の数から六十六部と呼ばれていました。最近の調査では、この六十六体尊を一堂にお祭りしているのは全国的にも非常に珍しい貴重なものとわかり、寺でも寺宝として大切に祀っています。

平賀源内先生遺品館の北向かいに真覚寺があります。

おかのさんみょうぼういん

真覚寺（岡野山妙法院）

本尊 阿弥陀如来

《当寺ははじめ天台宗にて阿州にありしを、今の宗に改め大内郡にうつり、また三木郡に移りて新蔵坊といふ。その後今の地にうつり、慶安八年今の寺号に改む。境内に名松樹あり、岡の松といへり。》江戶時代に編述された「日本名所風俗図会」に書かれた真覚寺の様子です。

既にこの頃から岡の松は有名で、東京小岩善養寺の影向ようじやうの松と日本一を競ったエピソードがあります。樹齢六百年を経て、平成五年に枯れてしまいました。真覚寺は十五世紀末に開創し、現在の本堂は文化二年の建築です。岡の松は枯れたものの、境内には四百五十年ほど前に植えられたくすのきが、平成十六年の台風による高潮により北側の枝は切り落としたものの、今もしつかりと立っています。

5 志度の桐下駄

さぬき市志度は全国に誇る桐下駄の産地です。明治末期に砂山房太郎氏によって初めて作られた桐下駄の製造は日本一（全国60パーセント）のシェアを誇ります。桐下駄の製造



工程は複雑で、機械化されたものの、まだまだ手仕事の部分が多く、熟練した職人の手により作られています。原材料の桐材は良質の新潟産が主で、一年間野積みされた後製品になります。

桐下駄作りが始まったのは、明治四十年。大正初期には生産量が急増し、今日の基礎を築きました。昭和三十年頃に最盛期を迎え、月産二十万足、年商二億円に達したそうです。生活様式の変化に伴い、下駄の需要が年々減少しています。



【参考文献】

『平賀源内展 図版』平成十五年十一月二十九日〜平成十六年八月二十九日開催

東京新聞発行

『香川の歴史散歩』

(株)山川出版社 1975年発行

『日本名所風俗図会 14 四国の巻』

(株)角川書店 昭和五十六年十二月三十日発行

『さぬき市ホームページ』